

## 『海のスフィンクス』出版にあたって

浜田 文

父、浜田知章の十冊目の詩集『海のスフィンクス』出版にあたり、多くの方々にあたたかい協力をいただきました。

この詩集の出版を思い立ったのは、昨年末のことです。

父は体調不良のため、ペンを持ってなくなり約一年が経っていました。全集出版から六年が経過し、その間詩誌に書きためた詩は二十篇を超えていました。巻末の二篇「美しい笑い顔」、「日本の哲学者」は二〇〇六年の十二月に、短時間でひらめいたようにほぼ同時に仕上げた作品で、口述筆記によるものとなりました。

父は体が動かなくなり、言葉が思うようにならなくても「詩の精神」は衰えていないことを私なりに感じ取っていました。父にはいつまでも「詩人」でありつづけてほしいと思い、父の十冊目の詩集を出版することにしました。現在長期入院中のため残念ながら、浜田知章本人が「あとがき」を書けない最初で最後の詩集となります。父がこだわり続けている「ヒロシマの哲学」――詩作が出来ない

私なりにその精神を受け継ぎ、私なりの手段で、現代に生きる世代に――そしてまた次世代に伝えていきたいと思えます。

企画・編集すべての面で多大なご尽力をいただいたコールサク社の鈴木比佐雄さん、スタッフの皆様さん、すばらしい表紙画を提供いただいた新井深さん、跋文を寄せていただいた大崎二郎さん、帯文を寄せてくれた叔父長谷川龍生に心から感謝いたします。

父、浜田知章八十八回目の誕生日にこの詩集をささげます。

二〇〇八年四月二十七日

# 浜田知章の眼光と勿忘草<sup>わすれなぐさ</sup>

鈴木比佐雄

二〇〇八年一月二十日

『原爆詩一八一人集』英語版の刊行を伝えると  
脳梗塞でベッドに横たわった人は

「文芸復興を 期待する」と

眼光鋭く剛直に

そして祈りのように語る

一九九四年春 藤沢駅で帽子を被り

杖をついた人が改札口で佇んでいた

初めて見た姿がくりかえし思い出される

駅前の馴染みの店でコーヒーを飲んだ

その人の詩人論を書くための

資料貸し出しを申し出ると快諾してくれた

鶴沼車庫前行きのバスに乗り込んだ

終点のバス停で降りると

鶴沼海岸の海風を感じた

数分で平屋建ての清貧な借家に着いた

庭に別棟の小さな書齋があり

山人舎という表札が掛かっていた

奥さんが息子のように出迎えてくれた

その日からその人を

父のように接するようになった

高知の岡本弥太を後世に残すために

原爆詩運動を始めるために

「山河」という個人誌を

戦後まもなく始めた詩人に

詩誌運動の精神を学ぶために

私は鶴沼車庫前行きのバスに

それから数えきれないほど乗り続けた

金沢の地酒を手土産にして

二〇〇八年四月三日 私は原爆ドームの前の

元安川の水辺に降りていく

石の階段の吹き溜まりに小さな勿忘草<sup>わすれなぐさ</sup>を見つけ

た

その一輪を摘んで一人の女性詩人に手渡した

その詩人が引き合わせてくれた人への感謝を込

めて

ステイブーンさん\*、無念な被爆者たちの思い

を汲みあげ

二度と核兵器を使用してはならないという思

いを込めた

祈りの言葉である『原爆詩一八一人集』英語

版の詩を

「全米原爆展」で紹介して読んで下さいます

んか

鈴木さん、『原爆詩集一八一人集』英語版を

とりあえず六、七冊送って下さい

それから紹介文のパンフも作って下さい

また三週間ほどアメリカの地方に何カ所か

行きます

被爆者の方と講演しながら一緒にまわる予定

です

それなら講演の中で『一八一人集』英語版か

ら

詩を一篇朗読してもらえないですか

出来ればご挨拶の中でステイブーンさんにも

読んで頂けませんか

上田由美子さんは入市被曝者で、  
長津功三良さんは同級生を亡くしております  
同行した二人の詩人の話もお聞き下さい……

このような詩人たちが祈りの言葉で詩を書き  
ました

この詩集に感動したらステイブンさんもぜ  
ひ

英語で核兵器を廃絶するために詩を書いて下  
さい

皆さんのお話はよく分かりました

生まれてから七歳まで私は日本に暮らしバイ  
リンガルでした

成人してからまた日本に来て日本語を学びま  
した

私も若いころ詩を書いていたのです  
翻訳も長い間してきたので

詩を外国語に翻訳する困難さも分かっています  
す

上田さんは七歳頃、入市被曝されたのですか  
長津さんも十歳ごろ

ドーム近くでたくさんの同級生を亡くなくさ  
れたのですか

そんな方たちが作った詩集ですか  
まずじっくり読んでみます

それからどう紹介するか考えさせて下さい  
アメリカの地方の人たちは被爆者が街に来て  
くれたら

歓迎して話をじっくり聞いてくれます

詩に触れたらきつと書きたい人もたぶん出て  
くるでしょう

ステイブンさんと話した広島平和文化セン  
ター脇の元安川の堤には桜が満開で

ナズナ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、オラ

ンダミミナグサの野草も溢れ咲き乱れている  
無数の桜の花びらが川面に落ちるように

あの八月の沸騰する川の中に皮膚を剥ぎ取られ  
水を求める無数の市民が転げ落ちていったのだ

一九九七年春 桜はまだ咲いていなかった

浜田知章さんが講演のため広島に行くことにな  
った

広島を自分の眼で見るべきだ、一緒にいこう  
と浜田さんは私の背を押した

広島駅改札口には長津功三良さんがカメラを持  
ち佇んでいた

浜田さんから薦められた宮沢賢治研究者である  
小倉豊文『ノー・モア・ヒロシマ』や

『最後の記録』を片手に広島島の街を歩きまわっ  
た

あの時に背中を押されなかったら 私は今どこ  
にいたろうか

浜田さんの講演の「ヒロシマの哲学」を聴かな  
かったら

『原爆詩一八一人集』まで決まらなかつた  
たらう

二〇〇一年九月十一日

ニューヨーク貿易センタービルに  
二機の旅客機が突っ込んでいった

「お前たちは太陽を射た。  
射た矢は返ってくるだろう  
やがて白日の下に自滅していくのだ  
その日が必ず来る。」

二〇〇一年十月七日 アメリカのアフガン爆撃  
前夜に

『浜田知章全詩集』出版記念会を広島市の詩人達  
が開いてくれた

最後の広島行きになると語っていた  
二〇〇八年三月十六日 浜田さんは『原爆詩集』  
英語版の

一九八九年に福田万里子さん描いた  
炎が真っ赤に燃えた花びらが原爆ドームの絵を  
眺めている

そして元安川脇に佇む原爆ドームを病床から思  
い起こしている

二〇〇八年五月 全詩集以後の二十五篇をまと  
めた

新詩集『海のスフィンクス』が発刊されるだろ  
う

戦艦大和と若き海兵たちは深海から浮上し  
スフィンクスは眼を輝かし  
エジプトの砂漠から立ちあがる

浜田さんの眼光は

宮沢賢治と小倉豊文の眼光と重なり

決して死ぬことはない  
放射能の吹き溜まりから勿忘草わすれなぐさが咲き出すよう  
に

その光を放ち続けている  
「ヒロシマの哲学」を  
語り続ける

\*ステイブン・ロイド・リーパー（一九四七年生まれ）

広島YMCAの教師を経て広島で二十年以上翻訳・通訳の会  
社に勤める。一九八五年から「世界平和運動家協会」を主宰し、  
核兵器廃絶運動に取り組む。二〇〇三年から財広島平和文化  
センターの専門委員となり、二〇〇七年から理事長となる。  
米国五十州と首都ワシントンの計百一都市で「全米原爆展」  
のプロジェクトの立案・実行者。二〇〇七年末まで二十一州  
三十一都市で開催されている。父の故ディーン・リーパー氏  
は一九五四年青函連絡船「洞爺丸遭難」で日本人家族を助け  
るために、自分の救命胴着を渡し犠牲となった。三浦綾子小  
説『氷点』にも書かれている。

浜田知章詩集『海のスフィンクス』に寄せて

浜田 文

鈴木比佐雄

コールサック社

2008